

図書館通信 —89—

1989. 10

館長就任に際して

附属図書館長 水野秀夫

本学附属図書館は、今や創立40周年の歴史を刻み、さらなる発展への道を進みつつある。この度、図らずも森口前館長の後を引き継ぐことになり、その重責を痛感している。まず大学図書館の本来の使命と、わが図書館の現状の認識に立って、一層の充実を目指して、及ばず乍ら微力を盡くす所存である。各位の御鞭撻を心から願う次第である。

言うまでもなく、大学の研究活動を支援するための研究資料の整備充実は、今日のように爆発的に増加しつつある学術情報を対象としては、多くの図書館の相互協力制度の確立なくしては不可能である。学術情報センターを中核とする全国的な学術情報システムの構築が着々と進行しているが、この中で本図書館の業務電算化の経過については、再三に亘り本誌に詳細に解説されてきた。当面する課題は、拡大してきた業務を一層迅速かつ効率化し、浜松分館の業務を本館と統合しトータルシステムを構築することである。そのための電算機システムの増強と更新が完了したところである。さらに今般発足した本学情報処理センターと協力し、学内LANを接続し、各研究室の端末から蔵書目録データベースを即座に検索可能とするシステムの実現をはかることである。

他方、教育活動を支援する機能は、原則として各大学が独自の方針と計画に従って充実に努めるべきであり、図書購入費の弛まぬ確保が必要である。それにつけても、館員による熱心なオリエンテーションや多くの教官による読書のすすめにも拘らず、学生の図書館利用は必ずしも充分ではないようである。より活発な利用のための具体策を見出したいものである。種々論じられているが、いずれにせよ学生の活字ばなれを克服するためには、図書館を優れた学術情報センターとするばかりでなく、学生に書物を提供する場とするための一層の努力が必要である。recreativeなentertainingな本のコーナーを設けることによって学生を書物(図書館)へ呼び寄せるといった案など肯定されないだろうか。

この他、時代とともに多様化した図書館資料として、分野によっては音声資料や映像資料は重要なものとなっている。これらの充実と設備の整備も必要である。ともあれ、心頭を滅却しなければならぬ程の暑熱環境は速やかに改善したいものである。

地域社会に対するサービスも今後の検討課題である。技術革新に伴う生活様式の変化、産業界の要請による労働力の有効な再利用、さらに余暇の増加などから、近年いわゆる生涯学習(教育)又はrecurrent educationの重要性と組織化が論じられている。放送大学の電波網もいずれ拡大するであろう。夜間大学院も実現しつつある。このような情勢下で、社会人からの大学図書館の利用の要望も高まると予想される。現状では、学生と職員を主たる対象として学術情報を提供する点を大学図書館の特色としているが、学術情報の提供は元来公共図書館の目的に内包されている。現に静大の学生・職員の中に寧ろ公共図書館を頻繁に利用している向きさえあると聞く。地域内の共同利用システムの構築は先のこととしても、本図書館の地域への開放について具体的なサービスの在り方を提示すべき時期が近いと思われる。相互協力の基本は利用する側の誠実さとサービスする側の寛容さである。

これまでの大学論議は入学問題に偏していたが、高等教育の在り方の論議が大学審議会で急速に進んでいる。本誌前号の森口前館長の御指摘は決して取越苦勞ではないように思う。来るべき時代の大学の在り方とともに、図書館の存在理由と果たすべき役割の認識を、大学構成員全員で確かめ乍ら、わが大学と図書館を革新し、発展させることが重要である。「図書館は大学の心臓」、「図書館は大学評価の尺度」という言葉が、単に概念としてあるだけでなく、真に誇るに足る大学図書館として具現されることを願うものである。限られた予算と人員という厳しい条件の中で、館員も使命感を抱いて、広範に亘る図書館サービスの向上に精励している。全学の皆様の格段の御協力と御支援を切望して止まない。

〈私のすすめたい本・57〉

L.B.ホールステッド著 『「今西進化論」批判の旅』 (築地書館)

河田 雅 圭

日本においてダーウィン進化論は「悪役」にされることが多い。ダーウィン進化論は、個人主義、競争社会などを代表する「西欧」の「進化論」であるとみなされる。そして、「学会で権威的であり、主流となっている」ダーウィン進化論に対抗する「反主流」進化論が、一般の人々や文化系学者に人気を得る。

ところが、ダーウィン進化論は日本では決して主流ではない。ごく最近まで、日本語で書かれたまともな進化論の教科書が一冊もなかったという事実がある。日本では80年代に入るまで、ソ連での進化論(ルイセンコやミチューリンなどのラマルキズム)、今西進化論、また、その他の「奇妙な」進化論が流行だったのである。日本における進化論の動向は、常に、反ダーウィニズムであったといえる。

今西錦司は、「棲みわけ理論」や「日本土着思想の進化論」を提唱した生物学者として有名である。今西の思想は、西欧合理主義による近代科学は誤りであり、「日本土着思想」が根本的に優れているというナショナリズムを支持する知識人によって人気を得て広まっていったのである。

しかし、もともと大東亜共栄圏の思想でもある西田哲学を基にしている今西の思想は、生物学に貢献するところはほとんどない。今西の思想に好意的な生物学者でも、今西進化論を有効であると考えている人は少数派であった。しかし、また逆に、今西進化論が学問的に、さらに思想的にも、きちんと批判されることもほとんどなかった。

今西は「国家のためならいまでも血をながさなければならぬのではないか」といったことまで書いているのだが、これまでの多くの知識人は、奇妙にも今西を批判することはなかった。

ホールステッドは、イギリスで柴谷篤弘の書いた論文を読み、今西進化論の存在を知る。その頃、ちょうど、彼は京都大学から招へい教授として招かれることになる。そして、ホールステッドは、日本に滞在している数カ月の間を今西進化論批判に費やした。

『「今西進化論」批判の旅』の前半は、ホールステッドが日本に来て書いた今西進化論批判の原稿である。彼は、その原稿を何人かの研究者に配り、コメントを求めた。後半部は、そのコメントに対

する反応と今西とのインタビューで構成されている。

この本に対する評価はすでにいくつか出されており、その中には批判的なものも多い。ホールステッドに対する批判は、外国人の日本批判に対する批判とよく似たものである。つまり、「日本に数カ月しかいなくて、日本語も読めないのに日本が理解できるのか」、「日本の文化は、外国人には理解できない」といった意味のものである。さらに、ホールステッドの立場を西欧の典型的な「個人主義」「西欧中心主義」とし、強国の思想を日本に押し付けるといった批評まで現れた。

日本文化や社会の独自性は、外国からの日本批判への防衛手段として常に用いられる。また、日本に対する外国からの批判は、一括して「欧米個人主義の日本社会に対する批判」と宣伝され、日本人のアイデンティティーやナショナリズムが高められたりする。日本文化の独自性を強調する思想は、日本の知識人によって作られた日本人をコントロールするためのイデオロギーであるといえるだろう。

ホールステッドのこの本も、同じように外国人による日本人批判として扱われる危険性がある。私は、ホールステッドは今西にかかわる状況と日本の社会をかなりの確にとらえていると思う。細かな誤りはあるが、それを取り上げて「日本を理解してない」とか、この本を単なる「日本たたき」としてしまつては、失うところが大きい。

この本は進化論について書いている生物学の本ではない。一種の日本論として読むといいだろう。ホールステッドは「古典的」ネオ・ダーウィニストであり、進化生物学に対する理解は適切であるとはいえないからだ。現代進化論の現状について知りたい人は、拙著『進化論の見方』(紀伊國屋書店)『はじめの進化論』(講談社現代新書、1989年12月頃)を読んで頂きたい。

(教育学部・生物学)

〈467.5/H 21 開架〉

女性の職場としての国立国会図書館

根本 猛

はじめにクイズをひとつ。TDLは何の略称だろう。これは知っている人も多いだろう、東京ディズニーランドの略称である。では、NDLは何かわかるだろうか。国立国会図書館(National Diet Library)の略称であることを知る人は少ないと思う。この英訳については、ある外国人が、「日本には、ダイエット(美食)の専門図書館があるのですか」と驚いたという笑い話がある。

国立国会図書館には二つの顔がある。ひとつは、国の中央図書館としての機能であり、もうひとつは、国会に置かれた図書館として国会議員の活動をたすけるという機能である。よく、国立国会図書館のことを、単に「国会図書館」と呼ぶ人が多いが、これからは、是非、「国立」をつけて呼んでいただきたいと思う。職員数においても、「国会図書館」に従事しているのは2割弱であるし、なにより、国会関係者以外の一般人にとっては、NDLは、国立図書館なのだから。(といっても、私自身、就職するまでは、「国会図書館」と縮めて呼んでいた)

ときどき、マスコミに、「女子学生人気企業ランキング」といった記事が出て、日本IBMなどが上位にランクされているが、私は、国立国会図書館こそ、わが国でも有数の女性を活用している職場ではないかと思っている。

NDLの職員の約4割は女性であり、40歳未満に限れば、女性職員のほうが多い。女性の管理職も7人を数えている。(ここでいう、「管理職」とは、課長以上を指す。これもマスコミで「女性活用企業」なる記事に、女性管理職100人以上とかいう記述があり、目をみはるが、よく読んでみると、係長あたりから管理職に数えていて納得する)また、子どもが3人、4人という女性職員も活躍している。

ある中堅の女性職員はいう。「私は、結婚したら退職しようと思って入館したが、まわりが誰も辞めないで、辞められなかった。子どもが生まれたら退職しようと思ったが、やはり、まわりが誰も辞めないで、今日まで仕事を続けてきた」と。

では、なぜ、NDLには多くの女性が入館し、長く勤められるのだろうか。まず、NDLでは、管理職人事を除けば、職員の昇進に関して、目立った男女差別がない(もちろん、当局は、管理職人事

についても差別はないといっている)。順調に勤務していれば、定年までに、課長補佐相当職までは昇進するのが通常である。次に、多くの中央官庁や大企業のような異常な長時間の残業がない。昇進のために残業は必要条件ではないのである。また、年次有給休暇は、すべて消化するのが当然であると考えられている。私も、よく、人出の少ない季節に休暇をとって旅行させてもらった。さらに、当然のことながら、転勤はない。ただし、残念ながら、育児休業や看護休暇などは制度化されていない。

このように、女性の職場としてのNDLについて紹介してきたが、女性にとって働きやすい職場は、結局、男性にとっても働きやすいのである。

逆に、NDL職員の働きにくさは何かということ、私は、若い職員の低賃金と東京の高家賃だと思う。高卒で入館したばかりの職員で民間アパートにいる人のなかには、親から援助をうけている例も少なくないときく。無理もない。高卒の初任給は、手取りで12万円弱くらいだろう。ここから、5万円の家賃を払うのは容易なことではない。ただ、この2点は、NDLだけでは、おそらく、解決できないことである。しかし、結婚や出産によって退職するのではなく、20年も30年も勤務するという観点からは、少なくとも、現在のわが国では、NDLは女性にとって魅力ある職場であることには変わりはないと思う。(わが国の他の職場が悪すぎるという評価は、もちろん可能である)

ここに、長々と国立国会図書館のことを書いたのは、若くて優秀な皆さんにNDLの未来を担ってもらいたいからにほかならない。NDLの職員となるには、司書などの資格は必要なく、毎年秋に行なわれる職員採用試験に合格すればよい。この試験は、国家公務員試験と同じく、I種、II種、III種にわけて行なわれ、それぞれ数名、合計20名ないし30名程度合格している。科目は、一般教養、語学、専門と面接である。

最後に断わっておくが、以上の記述は、私個人の理解に基づくものであり、NDLの当局や女性職員の見方とは大いに異なるところがあるかもしれない。また、NDLの女性職員は、決して、現状に満足しているわけではないのである。

(法経短期大学部・憲法)

古文書調査と図書館

本 多 隆 成

歴史研究においては、分野を問わず、史（資）料の調査が不可欠である。とりわけ、私のように戦国期から近世にかけて、東海地域を中心に研究を進めていくばあいは、地域内の古文書調査が欠かせない。

それはまた、自らの研究のみならず、教育面でもいえることである。すなわち、人文学科では2年生でそれぞれの専攻を決定するが、日本史学の学生は、さっそく古文書実習が始まり、これは3年生でも必修である。実習では、古文書の読解力を養成するのみならず、その整理・分類・保存の方法、さらに目録の作成までの指導を行う。

しかしながら、教室の中ではどうしてもできないことがあり、それを毎夏2泊3日かけて、古文書実習の野外調査として行っている。つまり、私にとっては、古文書調査は研究・教育の両面で不可欠であり、どのような目的の調査であっても、いずれの面でも役立っているのである。もとより、研究室の調査は学生の教育という面が強く、また、夏の研究室行事として、私一人の責任ではなく、スタッフ全員参加が原則である。

さて、個人的な調査であれ、また、研究室の集団調査であれ、調査に入る手がかりは、図書館と各市町村の教育委員会（それもとくに社会教育課の文化財担当者）である。ここでは図書館についてのみふれると、各市町村の図書館は必ずしも整備されているとはいえ、また、残念ながら静岡大学の図書館も十分ではない。少なくとも、県内に関する歴史関係の図書でいえば、県立中央図書館の郷土誌コーナーの方が充実していることを認めざるをえない。そのため、調査対象の市町村の関係資料は、まず大学の図書館で点検し、ついで県立図書館で再点検した上で、現地の打ち合せに出かけることを常としている。

私の直接の研究対象地域は、東海地域、それも旧三河・遠江・駿河の三国であるが、これまでの経験からいって、市町村の図書館の中で郷土関係資料が最もよく整備されているのは、岡崎市立図書館であろう。そこでは、三河国関係の資料がほぼそろっていて、研究面で多くの便宜を与えられた。静岡県でも、町村レベルではなかなか大変かもしれないが、市レベルでは、いっそうの充実が望まれるところである。

ところで、研究室の古文書調査についていえば、これまでは各市町村の古文書所在の悉皆調査を基本としてきた。古文書所蔵者のリストをあげてもらい、一軒一軒訪問して調査を行うのである。短時間で全古文書を分類・整理し、どのお宅に、どのような文書が、どの程度所蔵されているかを、家毎に一枚の台紙に書き上げていくのである。1日に2・3軒、二十数名が3班に分かれて出かけるので、2泊3日の調査でも、20軒ほどの基礎調査が可能である。このような調査方法は、古文書の概要を把握するにとどまるいわば第一次調査にすぎないとはいえ、1・2年でそれぞれの市町村の古文書所在のほぼ全容を知ることができるという点で意義があった。

そのような方法で、これまで遠州を中心に、大東町・大須賀町・浅羽町・袋井市・森町・引佐町・菊川町・小笠町・金谷町の調査を順次行ってきた。各教育委員会にとっては、古文書の所在状況が把握でき、文化財保護行政に資することになり、各所蔵者にとっても、とくにはじめて調査の手が入ったところなどでは、古文書の価値に対する認識が深まり、保存の面でも意味があった。

研究室にとっては、直接旧家を訪ねることで、学生の野外実習としての教育効果が大ききことはいうまでもないが、さらに、しかるべき古文書を借用し、原文書による実習を行い、目録を作成してお返しするという便宜もあった。昨年からは、はじめて駿河に入り、調査方法はかなり変わったが、5カ年計画で静岡市の調査を始めている。

ところが、1985年に静岡県史の編纂が始まったことで、調査の状況は一変した。県史編纂作業は、考古・古代・中世・近世・近現代・民俗の6部会に分かれて進められているが、今年はずでに5年目ということで、この春には、考古を除く各部会から、それぞれ1冊目の資料編が刊行された。本学からは8名ほどが、専門委員としてこの編纂に協力している。

私は、近世部会の専門委員として参加しているが、調査の方法として、従来研究室で行ってきた古文書所在の悉皆調査の方法が受け入れられたため、県下で一斉に、同様の調査がはるかに組織的に行われることになったのである。そして、市町村史の編纂や、古文書目録などが作成されていな

い地域から重点的に調査を進めたため、3年ほどで調査の手が入っていない市町村はほぼなくなつた。そのために、これまで研究室が行ってきたような基礎調査は、一応その使命を終えることになつたのである。

この県史の現地調査は、もとより基礎調査に終わるものではなく、直接には資料編・通史編の編纂のため、必要とおもわれる文書を写真撮影することに重点をおいている。過去4年間の累計で、調査対象1153箇所、撮影コマ数34万8千余となっている。これがすべてCH印画紙、B5に焼き付けられ、市町村ごとに家別でファイルして整理されている。今のところ来年いっぱいまで同様の調査が必要だと考えられるので、おそらく50万コマを越えることになるだろう。これは大変な財産であり、他部会で収集された資料をも含めて、県史編纂が終了するまでには県立文書館を建設し、将来にわたって整理・保管するとともに、所

蔵者の了解をえて、一般の閲覧にも供することが望まれる。

ところで、このような県史の編纂においても、各地の図書館、とりわけ県立図書館が果たしている役割は大きい。それは、いわゆる図書のみならず、戦前の県史編纂資料を始め、各種資料が所蔵されていることにもよる。その点では、静大図書館のばあい、郷土関係図書は先にも述べたごとく十分ではなく、所蔵資料で直接役立っているのは、おそらく明治以降の新聞が主で、あとは若干の資料があるくらいである。大学図書館の価値は、何も県史編纂にどれだけ貢献できるかなどで判断されるべきものではないとはいえ、地方大学の図書館が研究と教育のみならず、地域の知識と情報のセンターとしての役割をも果たすことが望ましいとすれば、やはり残念なことではある。

(人文学部・日本史学)

お知らせ(本館)

◎ファクシミリによる文献複写サービスについて

附属図書館本館では、他大学に所蔵している文献の複写物をファクシミリによって取り寄せるサービスを開始しました。これは国立大学附属図書館間における学術情報ネットワーク(学情VAN)を利用したものです。緊急に複写物を入手したい時に便利ですが、申込み先の大学内の文献の所在状態により、所要日数にはかなり異同があります。

なお、ファクシミリを導入している国立大学附属図書館は、8月末現在北海道大学ほか31館に限られています。この館数は年度内に59館となり、近年中に国立大学に設置されることが予定されています。

料金については通信料を含み1枚90円です。郵送による場合の料金と比較しますと、3枚まではファクシミリによる場合の方が安くなるようです。詳細は参考調査係(内線電話2903)にお尋ねください。

図書館利用票



0123456789

人文学部

安部利己

静岡大学附属図書館

もう受取りましたか……

あなたの図書館利用票が、できています。図書館のカウンターに学生証を提示してください。その場で、すぐに発行します。

昭和63年度図書館統計

■利用統計

(1) 本館貸出・閲覧

学生貸出・閲覧(学部別)

区 分	閱 覧 (出納)	貸 出		計
	冊 数	人 数	冊 数	冊 数
人 文 学 部	4,139	5,884	9,792	13,931
教 育 学 部	3,508	7,527	13,208	16,716
理 学 部	377	3,571	6,166	6,543
農 学 部	42	606	999	1,041
教 養 部	2,428	9,347	15,716	18,144
法 経 短 大		143	270	270
院 生 等	1,088	上記各学部を含む		1,088
計	11,582	27,078	46,151	57,733

学生貸出・開架図書(分類別)(冊数)

0 総記	377	5 工 学	2,622
1 哲学	1,846	6 産 業	753
2 歴史	2,634	7 芸 術	2,221
3 社会	10,532	8 語 学	831
4 自然	11,853	9 文 学	4,829
		計	38,498

教職員貸出(学部別)

	個 人		研究室備付		計
	人 数	冊 数	室 数	冊 数	冊 数
人文学部	804	2,043	247	1,278	3,321
教育学部	933	2,439	280	1,220	3,659
理学部	128	218	193	902	1,120
農学部	44	88	162	416	504
教養部	421	979	646	3,153	4,132
法経短大	116	318	204	2,059	2,377
事務職員	532	1,228	21	58	1,286
計	2,978	7,313	1,753	9,086	16,399

上記の貸出冊数以外に雑誌貸出、学生(264冊)、教官(129冊)がある。

(2) 学外者利用状況

他大学の学生	他大学の研究者	その他
100	20	71

(3) 浜松分館貸出(層別)

区 分	貸 出 冊 数
学 生	8,489
院 生 等	3,510
教 職 員	1,033
合 計	13,032

浜松分館(分類別貸出)

(冊数)

0 総記	146	4 自然	5,014	8 語学	71
1 哲学	23	5 工学	7,274	9 文学	150
2 歴史	18	6 産業	11	雑 誌	218
3 社会	80	7 芸術	27	合 計	13,032

(4) 文献複写統計

区 分	本 館			浜 松 分 館			
	人 数	件 数	枚 数	人 数	件 数	枚 数	
依 頼	学 生	389	393	2,677	} 515	1,291	8,745
	教職員	1,636	1,646	18,430			
受 託	学 内	8,219	17,831	84,787	78	206	1,149
	学 外	1,010	1,212	8,515	334	536	3,051

外国への文献複写依頼

区 分	本 館		浜 松 分 館	
	件 数	枚(コマ)数	件 数	枚(コマ)数
学 生	1	3	0	0
教職員	52	272	25	404
合 計	53	275	25	404

(5) 相互貸借冊数

区 分	本 館	浜 松 分 館
貸 出	14	0
借 用	108	19

○増加図書統計

() 内は昭和63年度末の累計

	本 館			浜 松 分 館		
	和 漢 書	洋 書	計	和 漢 書	洋 書	計
0 総記	840 (34,567)	269 (9,288)	1,109 (43,855)	87 (3,562)	79 (879)	166 (4,441)
1 哲学	976 (25,319)	454 (15,133)	1,430 (40,452)	5 (2,972)	16 (600)	21 (3,572)
2 歴史	1,487 (46,757)	280 (8,908)	1,767 (55,665)	11 (1,632)	2 (219)	13 (1,851)
3 社会	5,381 (136,204)	2,829 (44,938)	8,210 (181,142)	10 (3,410)	1 (437)	11 (3,847)
4 自然	2,185 (60,969)	2,274 (53,555)	4,459 (114,524)	781 (25,054)	755 (30,052)	1,536 (55,106)
5 工学	827 (22,824)	120 (4,122)	947 (26,946)	1,011 (35,326)	954 (22,144)	1,965 (57,470)
6 産業	697 (35,742)	227 (7,333)	924 (43,075)	9 (641)	1 (28)	10 (669)
7 芸術	644 (18,988)	78 (3,032)	722 (22,020)	4 (1,766)	1 (274)	5 (2,040)
8 語学	561 (17,903)	380 (11,961)	941 (29,864)	14 (3,061)	6 (2,137)	20 (5,198)
9 文学	1,183 (52,369)	705 (33,579)	1,888 (85,948)	17 (3,649)	0 (824)	17 (4,473)
計	14,781 (451,642)	7,616 (191,849)	22,397 (643,491)	1,949 (81,073)	1,815 (57,594)	3,764 (138,667)